

古文 助動詞これだけ100

迷ったら、まずこの100個。

助動詞27個を全部覚える前に、出るものから100問。

使い方 右の空欄に答えだけ書きます。1問10秒。

全部で100問。第1章だけでも、まず一周してください。

この100個の選び方 誰でも古典塾の無料ドリルから、入試・定期テストで実際によく問われる形だけを選び直しました。

き 次の傍線部「し」を識別せよ。

- 1 我れ思ひしこと、皆実となれり。
- 2 友、来（こ）しかば、酒酌み交はしけり。
次の傍線部「しか」を識別せよ。
- 3 我れ昨日、京に行きき。
次の傍線部「き」を識別せよ。
- 4 我れ若くありせば、いかにせまし。
次の傍線部「せ」を識別せよ。
- 5 春しくれば、花咲く。
- 6 来し方。

けり 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

- 7 我が見ける世界、なほ夢のごとし。
- 8 我が思ふ人は、いまは帰りけり。
次の傍線部「けり」の用法を答えよ。
- 9 昔、男ありけり。
次の傍線部「けり」の用法を答えよ。
- 10 月清く照りければ、夜なほ明るし。
次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。
- 11 いと哀れと思ひけれど、口に出さず。
次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。
- 12 その声、都までや聞こえける。

つ・ぬ 用法を答えよ。

- 13 春過ぎて夏来たりぬ。
- 14 我れ歌詠みつるものを、人皆冷たし。
- 15 我れも詠みつべきを、いまだ詠まず。
- 16 古き世にありぬべき人。
- 17 古典を学びぬべき時なり。
- 18 春の野に若菜摘みつ。

ぬ 次の傍線部「ぬ」を識別せよ。

- 19 来ぬ人を待つ宵の更けゆけば。

20 月の明かき夜、はかなく更けぬ。

21 静かにぬれば、夢に故郷をぞ見る。

22 夜更けて、人みなぬ。

23 いと安らかにぬる夜なり。

ね 次の傍線部「ね」を識別せよ。

24 我が思ふこと言はねど、知らる。

25 早く立ちね、と道行く人を急がし給ふ。

26 日暮れぬれば、家路を急ぐ。

27 寝ねばや、と思へど、寝られず。

ず 「ず」を識別せよ。

28 我れ仕うまつらずして、退きいづ。

29 物のあはれを解せざる人にあらず。

30 心ある人にあらねば、これを解せず。

31 物のあはれを知らぬ人にあらず。

32 月見ぬ人、世になし。

次の傍線部「ぬ」を識別せよ。

る・らる 用法を答えよ。

33 ある時は、御使ひに召し出ださる。

34 月の出でぬるに、ふと見出ださる。

35 その花、いとうつくしと見らる。

36 心定まらずして、なほ書かれず。

37 上、いみじう涙落とさせたまふ。

38 中宮、御文書かせ給ふ。

39 字、読まれず。

40 帝、御文を書かせたまふ。

す・さす・しむ 次の傍線部「させ」を識別せよ。

41 大臣、御簾の外に出でさせたまふ。

42 主君、家臣に城を築かしめたまふ。

次の傍線部「しめ」を識別せよ。

43 院、人々を集めさせたまひて、酒を飲ませたまふ。

次の傍線部「させ」「せ」をそれぞれ識別せよ。

44 世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし。

次の傍線部「せ」を識別せよ。

45 院、御物の怪に取り憑かせたまふ。

次の傍線部「せ」を識別せよ。

46 帝、人をして御文届けさせたまふ。

む 次の傍線部「む」の用法を答えよ。

47 春の野に咲かむ花、いまだ知らず。

48 我れ、いま死なむものを、と嘆く。

49 唐土に渡らむ人、すくなからむ。

次の2つの「む」の用法をそれぞれ答えよ。

50 我れ知らむやと、人問ふ。

51 君行かむほどに、文書きてやらむ。

52 月清けき夜、歌詠まむやは。

べし 次の傍線部「べし」の用法を答えよ。

53 我れ古都に住まひすべきものなり。

次の傍線部「べき」の用法を答えよ。

54 我れ、風流を解する人にはあらざるべし。

55 我れもまた、その道を行くべし。

56 君、おとなしくすべし。

57 都に住む人、皆風雅を解すべし。

58 あらゆる事、はかり知るべからず。

次の傍線部「べから」の用法を答えよ。

59 春の野に若菜を摘むべし。

60 月の都の人ならば、いま帰るべきぞ。

次の傍線部「べき」の用法を答えよ。

まじ 用法を答えよ。

61 いみじき御学才、誰にも劣るまじ。

62 我れ、これより一步も退くまじ。

63 ゆめゆめ、あらぬさまにふるまふまじ。

64 あだなる契りはなすまじきものぞ。

65 いまだ若ければ、よろづ知るまじ。

らむ 次の傍線部「らむ」の用法を答えよ。

66 蛍の光、明らかなるらむ草の上。

67 行く春や、今ごろ何方に行くらむ。

68 我れは知らねども、人は知るらむ。

69 唐土に渡るらむ人、なほ風雅を解すらむ。

次の2つの「らむ」の用法をそれぞれ答えよ。

70 月かたぶくらむ夜半に、起きて見る。

けむ 次の傍線部「けむ」の用法を答えよ。

71 雪深く積もりけむ山、いまだ青し。

72 古典作家、いかなる景色を見けむ。

73 古代の宮、いにしへ何処にありけむ。

74 昔の人も、月見ては歌詠みけむ。

なり 「なり」を識別せよ。

75 古典の才ある人なりければ、皆敬す。

76 嵐の音、いまだ止まずなり。

77 月の都に住む人なりけり、と聞く。

78 奥山に、鹿ぞ鳴くなる。

79 古典の道を究むる人なるべし。

80 月の都の人なるを、世の人は知らず。

めり・らし・なり 次の傍線部「なり」は、ア～エのどれか。

81 軒の松に、風の渡る音すなり。

ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）

82 この笛、世に名高き宝なり。

ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）

83 病、日にそへて重るめり。

次の傍線部「めり」は、ア～エのどれか。

ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）

84 （歌）富士の嶺に、雪はなほ降るらし。

次の傍線部「らし」は、ア～エのどれか。

ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）

85 山風に乗りて、遠く笛の音の聞こゆなり。

ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）

まし 「まし」の用法を答えよ。

86 古典を読まましかば、心養はまし。

87 いかなる宿世にかあらまし。

88 行かましやは。

89 時戻るものならば、若き日に帰らまし。

じ

90 勝たんと打つべからず。負けじと打つべきなり。（徒然草）

ア 打消推量／イ 打消意志／ウ 打消当然／エ 不適當

91 「まじ」の意味はいくつあるか。

ア 2つ / イ 3つ / ウ 6つ / エ 1つ

92 翁言ふやう、「この子はわれ守らむ。人手には渡さ じ」と。

次の文の「渡さじ」の意味を選べ。

ア 打消意志 / イ 打消推量 / ウ 不可能 / エ 打消当然

93 親のあらむ限りは、われはこの家を出で じ。

次の文の「出でじ」の意味を選べ。

ア 打消推量 / イ 禁止 / ウ 不可能 / エ 打消意志

まほし・たし 次の文の訳として正しいものを選べ。

94 われは故郷へ帰りたし。

ア 私は故郷へ帰った。 / イ 私は故郷へ帰るはずだ。 / ウ 私は故郷へ帰りた
い。 / エ 私は故郷へ帰ってしまった。

95 この花を見まほし。

ア この花を見たい。 / イ この花を見た。 / ウ この花を見るな。 / エ この
花を見るだろう。

96 次のうち接続が誤っているものを選べ。

ア 聞きたし / イ 聞きまほし / ウ 聞かまほし / エ 聞きたき

むず 次の傍線部を識別せよ。

97 きこそ思はむずれ、口には出ださず。

98 われ、いかにもして本意遂げむず。

ん

99 何の用にも立たじ。捨てんものを。

100 心づくしの秋風、いかに吹くらん。